

竹富島における移住者価値とネットワークが果たす役割

大和里美（奈良県立大学）

Keyword：移住・定住、S-D logic、価値共創

【背景・目的】

少子高齢化の急速な進展によって、わが国の人口は、2008年をピークに減少に転じ、2053年には1億人を割り込むと予測されている¹⁾。人口減少・高齢化は、地域経済の停滞やコミュニティ機能の低下などによって地域の衰退を招き、地域の存続そのものが困難になる。2014年に日本創生会議が発表した2040年までに消滅する恐れがある「消滅可能性都市」は、全国約1800市町村のうち約半数の896市町村にのぼり、多くの自治体では、人口維持のために地域が有する資源を活用し、観光振興や空き家バンクをはじめとした移住・定住を促進するための様々な施策を工夫している。

人口減少・高齢化は、全国的な課題であるが、特に中山間地域や離島などは厳しい状況にあり、地域運営の担い手が不足することでコミュニティを維持することが難しくなっている地域も見られる。このような地域では、都市部に比べ古くからの伝統や習慣が守られている上に住民の結束が強固なところが多く、せっかく移住してきても地域になじめなかったり、元からの住民との間で摩擦が起ったりすることによって短期間で他所へ移ってしまうこともあり、定住を促進する価値を地域に生み出すことが求められる。

本研究では、事例として沖縄県八重山郡竹富町に属する竹富島を取り上げ、サービス・ドミナント・ロジック（Service Dominant Logic：以下、S-D ロジック）の視点から²⁾、地域における移住・定住に繋がる価値共創について、特に移住者にとっての文脈価値と価値共創における移住者間のネットワークが果たす役割を中心に考察する。

【研究方法・研究内容】

2018年7月・12月及び2019年2月に竹富島を訪れ、島内で開催された3つの会合と1つの行事において、非参与観察と参加者へのインフォーマル・インタビューを行うとともに、移住者20名に対して、半構造化インタビューとインフォーマル・インタビューを実施し、移住者が認める価値と価値が共創される文脈、及び価値共創における移住者を取り巻くネットワークが果たす役割について調査を行った。

有形財を中心に据えるG-Dロジックでは、生産過程で財に付加された財そのものの価値、すなわち金銭と交換され

る際の交換価値（value-in-exchange）を価値と捉える。一方S-Dロジックにおいては、サービス供給者と顧客との相互作用や協働活動のプロセスの過程で、顧客が価値を認めてはじめて価値が生まれる（価値共創）ため、価値はそれを知覚する文脈によって影響を受け、文脈価値（value-in-context）と呼ばれる（Vargo et al. 2008）。このように、S-Dロジックの視点に立てば、移住者にとっての価値は文脈価値であり、価値を明らかにするためには、価値が共創される文脈について理解することが重要となる。

また企業活動のような経済的な価値創造においては、価値共創の際に当事者であるサービス供給者と顧客は、自らのオペラント資源（ナレッジ・スキル）の不足を補完するものとしてそれぞれのネットワークを活用するが（Vargo 2008）、本研究では、定住促進という社会的な価値創造における当事者のネットワークがどのように活用されているかについて分析する。

【調査結果】

（1）竹富島の概要と調査対象移住者の属性

竹富島は、石垣島から高速船で約10分の距離にある周囲9.2km、面積5.43km²の小島で、島の北西部にある3つの集落に340名余り³⁾の島民が暮らしている。美しい自然と重要伝統的建造物群保存地区に選定された町並みや重要無形民俗文化財に指定された種子取祭（タナドゥイ）などの豊かな文化遺産で知られ、観光で島を訪れたことが契機となって移住を希望する人も多い。



写真1 竹富島の町並み

出所：2018年7月1日 筆者撮影

竹富町では、年に2回東京での移住フェアに参加し移住希望者からの相談を受け付けているが、役所を窓口とした移住では、竹富島の集落自治組織である地縁団体法人竹富公民館（以下、公民館）が中心となって移住までのプロセスを管理し、島民として受け入れるのに相応しいかどうか時間を掛けて検討され、島の基本的精神として受け継がれている「うつつみ」の精神（一致協力の精神、助け合いの精神）を実践できると認められた者だけに住まいが紹介され移住することができる。また民宿などの宿泊施設やエビ養殖場などで働くために移住してくる人もおり、結婚や島出身の親がUターンするのに伴って移住した人も含めると島で生まれ育った人よりも島外から移住してきた人の方が多数を占める。島では古くから続く祭祀を次代に継承していくことが重視されており、移住者にもその役割の一端を担うことが求められる。



写真2 お遊戯会で種子取祭の棒術を演じる保育園児
出所：2018年12月8日 筆者撮影

竹富島の移住者は、①Uターン者及び家族のUターンに伴う移住者、②島民との結婚による移住者、③島内の企業などに就職したことによる移住者（Uターン者とその家族を除く）、④公民館の管理するプロセスを経た移住者、⑤その他の移住者、に大別することができる。このうち、Uターン者は元々島の出身であり、その家族も含めて島の事情には通じていることが多い。島民との結婚による移住者は、島民の家族として移住するため島内の慣習や決まり事をはじめ島内で生活するに当たって必要となる情報は家族や親族から得ることができる。島内に就職した場合は、就職先で経営者や同僚などから情報を得ることができる。また公民館のプロセスを経て移住した場合は、移住に至るまでに島を理解し島民との交流によってネットワークも築かれる。その他に分類される移住者は、観光で何度も島を訪れ滞在している間に島民と親しくなり、親しい島民から住居を借りることができて移住した者などである。①～③に該当せ

ず、町が移住の窓口となる前に移住してきた人や島内企業に就職するのではなく自ら起業した人、移住者との結婚のために移住した人などがこれに当たる。

表1は、属性別の調査対象者数を示したものである。

表1 調査対象者の属性

		人数
性別	男性	10
	女性	10
年齢	20代	1
	30代	5
	40代	7
	50代	6
	60代	0
	70代	1
移住後年数	1年未満	4
	1～3年	4
	3～5年	3
	5～10年	2
	10年以上	7
移住の理由	Uターン	1
	結婚	1
	就職	12
	役所通じて	0
	その他	6

男性と女性は各10名で同数であった。年齢別では30代から50代で8割を占めている。移住後の年数では、3年未満が8名、10年以上が7名と移住後比較的日子が浅く未だ定住には至っていない層と移住してから相当年数を経ている層がほぼ同数となった。移住の理由としては「就職」と答えた人が12名と最も多かったが、観光などで島を訪れ移住を希望する場合、島内の仕事に就くことが移住への近道であり、民宿や水牛車のガイドなどの観光関連の求人も比較的に見つけやすいことが原因と考えられる。これに対して移住に至るまでのハードルが高い役所を窓口とした移住者は含まれていなかった。

(2) 移住者にとっての価値と価値共創の文脈

インタビュー調査からは、移住者の文脈価値に繋がる以下のようないくつかのキーワードが抽出された。

自然・静かな環境

- ・もともと自然が好きで、魚を捕ったり、貝を採ったりするのが楽しくて竹富島に住んだ。今でも島に住んでいる一番の理由は自然の魅力だ。
- ・自然との距離感が丁度良い。自然は自分が行けばそこにある。
- ・竹富島の良さは、豊かな自然と言葉では表せないこの空

気感で、この空気感が何より好きだから嫌なことがあっても気に入って暮らしている。

- ・島の良さは静かで落ち着けること。

親切・支援

- ・島の人は親切だし、人が優しい。
- ・困ったことがあると近所の人がみんなで協力して助けてくれ、うつぐみの精神を感じる。
- ・子供とお年寄りを大切にし、子供のことは集落で可愛がってくれる。

承認

- ・お年寄りが丁寧な対応をしてくれるので、尊敬の念があり手を抜けないと思うし、やったことは認めてくれる。
- ・島では財団のこと⁴⁾など色々やることがあり、自分の存在意義を感じる。
- ・島の良さは、自分ができることがあり、人との関係が濃いのでお互いに一人一人の個性がわかっている能力を活かせるところだ。そして認めてもらえる。

繋がり

- ・観光客でも何度か来ていると周りの人たちが顔を覚えて道を歩いても声を掛けてくれる。
- ・皆がお互いに知っているし人付き合いも密で声を掛けてくれ、人の温かさを感じる。
- ・人と地域との繋がりが近く濃厚で、それが良い。

これらのキーワードからは、①島の自然や雰囲気などの環境、②信頼や結びつきというソーシャルキャピタルの蓄積とそれによって生まれる安心感や安全、③自分の居場所・存在意義を感じ、自己実現のチャンスが与えられる、という移住者の価値が認められた。特に子供を持つ女性は②について高い価値を認めており、③に高い価値を認めているのは男性であった。

また価値共創の文脈として次のような文脈が挙げられる。

- ① 移住してきた直後に島の人と接したときに価値が共創される。親切にしてもらえると価値が生まれるが、反対に歓迎されていないと感じるような出来事があると島内の付き合いに消極的になることがある。
- ② 安心感や安全という価値については、特に子供が関わる文脈で認められる。
- ③ 集落やPTAの集まりや行事、財団設立のような島の将来を左右する意思決定の場などで価値が共創される。

(3) 移住者間のネットワークが果たす役割
インタビューと参与観察を通じて調査対象者のネットワ

ークについて分析し、相互の繋がりを分析した結果が図1である。⑭の移住者については、特定の移住者との交友関係が不明であるため除いている。二重線は夫婦あるいはパートナーの関係を表す。オレンジ色および赤色は移住理由が「その他」の移住者である。移住者間を結ぶ線は普段よく連絡を取って情報を交換したり、困ったときに助け合ったりする関係を示している。線で結ばれていない相手とは全く交流がないということではなく、島内の居住者は互いに顔見知りであり、名前を知っていることは勿論、近くに住んでいると話しをするというような交流はある。

また公民館は、1963年の公民館長制度導入によって生まれた高度な自治組織で、島の祭祀と行事を司り、島の重要な決定事項については公民館議会で検討される。他にも各集落には青年会・婦人会・老人会があり、代々竹富島に住む島民が中心となり島の歴史や伝統を伝える場となっている。公民館との間の線が太いほど島民との交流が活発であることを示す。

表2 調査対象者の移住理由と移住後の年数

移住者	移住の理由	移住後年数
①	Uターン	10年以上
②	結婚	10年以上
③	就職	10年以上
④		10年以上
⑤		10年以上
⑥		5~10年
⑦		5~10年
⑧		3~5年
⑨		3~5年
⑩		1~3年
⑪		1~3年
⑫		1年未満
⑬		1年未満
⑭		1年未満
⑮	その他	10年以上
⑯		10年以上
⑰		3~5年
⑱		1~3年
⑲		1~3年
⑳		1年未満

「Uターン」・「結婚」・「就職」によって移住した移住者は、「移住後積極的に島内の会合や行事に参加」している人が多かった。一方「その他」の移住者では、「全く、あるいはほとんど参加しない」人が多く、代々島に住む島民との間に一定の距離があることが伺える。子供を持つ移住者は、積極的でない場合でも「無理のない範囲で参加」と答えており、PTAのような保育園や小学校での付き合いで島民と親しくなる上に、子供が島で生活しやすいように島民と良い関係を築くことを意識していると考えられる。「全く、あ

るいはほとんど参加しない」移住者は、「その他」の理由で移住してきた人が多く、「就職」での移住の場合も就職後短期間で独立した人や町からの仕事の要請によって期間限定で移住した人であった。

公民館や集落の会合などにあまり参加していない移住者は、移住者同士で助け合う関係を構築していたが、特に移住者⑮は、ほぼすべての移住者が「お世話になっている人」として名前を挙げた。⑮は、現在の公民館執行部の親世代と親しかった移住者であり、半移住期間を含めると40年余り前から竹富島に住んでいる。移住者間のネットワークと、昔の島の様子を知り島の習慣などの島内の事情にも通じている定住者の存在が、移住者の価値の源泉となっていた。

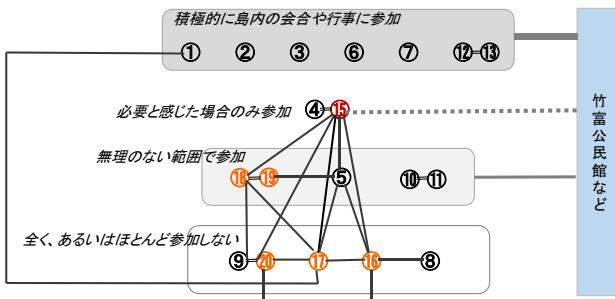


図1 移住者間のネットワーク

【考察】

本研究では、以下の点が明らかになった。

第1に、移住者は、①島の自然や雰囲気などの環境、②信頼や結びつきというソーシャルキャピタルの蓄積とそれによって生まれる安心感や安全、③自分の居場所や存在意義を感じ、自己実現のチャンスが与えられる、という価値を認めていた。①については、移住者の属性による違いは見られなかったが、②については子供を持つ女性が、③については男性が特に高い価値を感じていた。

第2に、価値が共創される文脈として、①移住してきた直後の時期での交流の文脈、②子供が関わる文脈、③島内の会合や行事における文脈、が重要であることがわかった。従って、島の価値を高めるためにはそれぞれの文脈を管理することが重要である。

第3に、経済的な価値創造においては、サービス供給者と顧客は、自らのオペラント資源の不足を補完するためにネットワークを活用するが、移住者にとっての移住者相互のネットワークは、オペラント資源の不足を補うものであると同時に、移住者＝島民であるために地域の価値を共創する相手でもあった。特に島民との交流が少

ない移住者にとっては、移住者相互の価値共創が島内での価値共創の中心を占めていた。そのため移住者にとっての価値を創造するには、価値提案ができる島の事情に通じた定住者の存在が重要であるといえよう。

本研究では、S-D ロジックの視点から、竹富島における地域と移住者の価値共創について考察した。今後は、竹富島で得た知見をもとに、竹富島より多くの移住者が生活する石垣島において、移住者を対象としたインタビュー調査とアンケート調査を行い、価値共創のプロセスと文脈価値の分析を中心に移住・定住に繋がる価値共創のマネジメントについてさらに研究を進めていく予定である。

謝辞

本研究は、JSPS 科研費 18K18280 の助成を受けたものである。ここに記して謝意を表す。また調査にご協力いただいた竹富島の皆様に心より感謝申し上げます。

注

- 1) 国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口（平成29年推計）」(<http://www.ipss.go.jp/index.asp>, 2019年7月2日取得)による。
- 2) S-D ロジックの視点は、企業活動のような経済的な価値創造だけでなく、社会的な価値創造を捉える上でも有効な考え方である (Vargo and Lusch 2008)。
- 3) 竹富町地区別人口動態票平成31年3月末の人口は344名である (竹富町HP:<https://www.town.taketomi.lg.jp/>, 2019年7月9日取得)。
- 4) 竹富島の自然を守るため、入域料徴収などの活動を行う財団で、現在設立に向けて準備が進められている。

【引用・参考文献】

- 1) Vargo, S. L., P. P. Maglio and M. A. Akaka (2008) "On Value and Value Co-Creation: A Service Systems and Service Logic Perspective", *European Management Journal*, Vol. 26, No. 3, pp. 145-152
- 2) Vargo, S. L. (2008) "Customer Integration and Value Creation", *Journal of Service Research*, Vol. 11, No. 2, pp. 211-215
- 3) Vargo, S. L. and R. F. Lusch (2008) "Service Dominant Logic: Continuing the Evolution", *Journal of the Academy of Marketing Science*, Vol. 36, No. 1, pp. 1-10